

研究所と教育改革	1
2006年度「指定研究」研究組織一覧	2
2006年度「指定研究」研究目的紹介	4
2006年度「一般研究」選考結果発表	8
2006年度「一般研究」研究目的紹介	9
学会参加報告	14
特別研究員研究成果報告	20
彙報	24

# 研究所報

No.48

2006. 5. 1.

## 研究所と教育改革

文学部長 草野 顕之

本年3月まで教務委員を4年間務め、その最後の2年間は委員長職にあった。この間の委員会の主たる課題はカリキュラム改革にあったといえる。カリキュラム改革は継続的に行っていかなければならない大学の重要な課題であるが、その第一弾として、昨年度からいくつかの事が実行に移された。

その第一は、新生生に対する大学導入科目「学びの発見」の実施である。近年、高校教育と大学教育の違いに戸惑い、スムーズに大学にとけ込めない学生の増加が問題とされていた。このため、転換教育・接続教育等とも呼ばれる初年時教育プログラムに工夫をこらす大学が増えてきていた。

大谷大学でもこうした動向を受けて、大谷大学独自の大学導入科目を実施すべく、教務委員会で検討を重ねて、「学びの発見」という初年時教育プログラムを創りあげ、実施に移したのである。

この「学びの発見」は、アイデアを広げる練習である「ブレンストーミング」、アイデアを整理する練習である「KJ法」、アイデアを他者へ伝える楽しさを学ぶ「レポート作成」、他者の発想に学ぶ「資料収集とリスト作成」の4つのユニットで構成され、総じて学ぶことの楽しさを体験することに主眼が置かれた授業である。この科目を実施した効果については、受講生が卒業する3年後をまたねば最終的判断はできないが、少なくとも昨年度末の退学者数が、ここ数年の平均値の3分の1に激減したことは注目しなければならないだろう。

この他、学科導入科目として「専門の技法」の新設、自由科目群を16種のセットに整理再編して関連づけた学習を促す「セット科目」の新設、また科目名を授業内容を反映した名称に統一する作業など、いくつかのカリキュラム改革を実施してきたが、とりわけ教務委員会が全精力を傾けたのが、この「学びの発見」であった。

この「学びの発見」開発にあたって主導的役割を果たしていただいた委員は、1999年度から4年間にわたって真宗総合研究所で行われた委託研究「大谷大学FD研究」班で活動していただいた先生である。また、プログラム開発にあたって助言いただき、かつ昨年度には授業も担当していただいた京都文教大学の中村博幸先生は、最終の2002年度にこの研究班の嘱託研究員を務めていただいた方であった。

その「大谷大学FD研究」班の研究経過報告には、「本学に相応しいFDとは、単に教育技術の向上や補習授業のノウハウを研究することに甘んじるものであってはならず、あくまでも人と人との生きた関わりの中かで共に学びあい、成長しあうことを可能にするFDであり、一人一人の学生の資質に応じた学びの満足感と豊かなコミュニケーション能力を引き出すFDであろう」（『研究所報』No.40）とあり、教務委員会で論議した大学導入科目の理念が既にして語られている。また、採用されるべき具体的な方法についても、「ブレンストーミングを応用した発想法重視型基礎演習」（『研究所報』No.41）との指摘も行われていたのである。

この「大谷大学FD研究」班は、大学にFDに関する常設機関が設置されることを期して終結したが、この研究班での研究や調査や議論が、今回の「学びの発見」プログラムの開発に結びついていることは明らかであり、大学の車の両輪とも言うべき「教育と研究」とがうまく連動した好例であろう。

大学における教育の背景に研究があることは当然である。多くの場合、研究活動によって深められた研究成果が、講義等を通して学生にフィードバックされるという形をとっており、それも大事な連関であろう。しかし、この「大谷大学FD研究」班の研究成果と「学びの発見」との連動は、そうした通常の「教育と研究」との関係を超えたあり方の一例として、評価しなければならないのではなからうか。

## 2006(平成18)年度「指定研究」研究組織一覽

### 【特別指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
大谷大学親鸞聖人 750回御遠忌記念 特別指定研究	研究課題	親鸞像の再構築
	研究員	安富信哉 (チーフ・教授・真宗学)
		門脇健 (教授・宗教学)
		木越康 (助教授・真宗学)
		山野俊郎 (助教授・仏教学)
		東館紹見 (講師・日本仏教史学)
	嘱託研究員	平雅行 (大阪大学教授)
		小山正文 (同朋大学非常勤講師・安城市本證寺住職)
		山田恵文 (本学短期大学部助手)
	研究補助員	三木朋哉 (博士後期課程第3学年)
		松金直美 (博士後期課程第3学年)

### 【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
大学史研究	研究課題	大学史関係資料の収集・整理・公開
	研究員	織田顕祐 (チーフ・助教授・仏教学)
		加来雄之 (助教授・真宗学)
		東館紹見 (講師・日本仏教史学)
	嘱託研究員	福島栄寿 (真宗大谷派教学研究研究所研究員)
		西本祐攝 (本学非常勤講師)
	研究補助員	加藤基樹 (博士後期課程満期退学)
		橋本真 (博士後期課程満期退学)
		日野圭悟 (博士後期課程満期退学)
	森剛史 (博士後期課程満期退学)	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と必要資料の整理・収集・公開
	研究員	宮下晴輝 (チーフ・キャップ・教授・仏教学)
		門脇健 (キャップ・教授・宗教学)
		桂華淳祥 (キャップ・教授・東洋史学)
		田辺繁治 (教授・社会人類学)
		木越康 (助教授・真宗学)
		松川節 (助教授・東洋史学)
		村山保史 (助教授・西洋哲学)
		阿部利洋 (講師・社会学)
		井上尚実 (講師・真宗学)
		藤枝真 (講師・哲学・宗教学)
		箕浦暁雄 (講師・仏教学)
		田村晃徳 (講師・真宗学)
	嘱託研究員	羽田信生 (毎田周一センター所長)
		Michael Pye (本学客員教授・マールブルク大学名誉教授)
		Jan Van Bragt (南山大学名誉教授)
		Mark L. Blum (ニューヨーク州立大学助教授)
	Paul Watt (デポー大学教授)	
研究補助員	山本琢 (博士後期課程第3学年)	

	研究補助員	宮本浩尊 (博士後期課程第2学年) マイケル・コンウェイ (博士後期課程第1学年)
西藏文献研究	研究課題	チベット語文献のデータベース化
	研究員	福田洋一 (チーフ・教授・仏教学) 小谷信千代 (教授・仏教学) 白館戒雲 (教授・仏教学) 三宅伸一郎 (講師・チベット学)
	嘱託研究員	Steven Hartwell (マルチスクリプトソリューション社) 野村正次郎 (広島修道大学非常勤講師) 井内真帆 (中国・西南民族大学研究生) 清水洋平 (本学非常勤講師)
	研究補助員	目片祥子 (博士後期課程第3学年) 人見牧生 (博士後期課程第3学年)
真宗本廟 (東本願寺) 造営史研究	研究課題	真宗本廟 (東本願寺) 造営史料の研究並びに『真宗本廟 (東本願寺) 造営史』の編纂
	研究員	木場明志 (チーフ・教授・国史学) 平野寿則 (講師・日本近世史・仏教史)
	嘱託研究員	伊藤延男 (神戸芸術工科大学名誉教授) 川上貢 (京都大学名誉教授・(財)京都市埋蔵文化財研究所長) 永井規男 (関西大学名誉教授) 山岸常人 (京都大学大学院助教授) 安藤弥 (同朋大学専任講師) 江上琢成 (種智院大学非常勤講師) 登谷伸宏 (京都大学博士課程修了)
	研究補助員	大谷めぐみ (博士後期課程第3学年)

# 2006(平成18)年度「指定研究」研究目的紹介

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

## 親鸞像の再構築

チーフ・教授 安富 信哉  
(真宗学)

2011年、真宗大谷派は親鸞聖人750回御遠忌を迎える。本研究班は、御遠忌記念事業の一環として「親鸞像の再構築」という研究課題をもって発足した。

親鸞の思想や、その思想を巡る歴史的有り様は、時代に応じつつ様々に展開してきた。特に、先の親鸞聖人750回御遠忌以降の50年に注目するならば、宗門では、それが〈個の自覚の宗教〉をスローガンとする同朋会運動として展開し、本学では、清沢満之の精神主義思想を基礎とする〈近代教学〉を形成してきた。

一方、現代社会に眼を移す時、人類はあらゆる分野で著しい発展を見せる反面、様々な領域で次第に混迷の度合いを深めている。そのような中で、宗教に対する拒絶と欲求が交錯している社会的事象と対面せざるを得ない。

本研究班は、このような親鸞思想を巡る諸状況を整理検証し、学際的な視点から、親鸞思想の現代的意義を明らかにすることを目的としている。具体的には、以下の4つのテーマを立てて、相互に連携しつつ研究を行う。

### 1、史的な親鸞像の再検討

前回御遠忌以降、親鸞像のイメージにはいくつかの新しい視点が提起されてきた。これらの視点を俯瞰的に概観し、各視点の特色を明らかにするとともに、それらを踏まえて親鸞像を構築する研究を行う。

### 2、思想教学の検証

大谷大学・宗門における親鸞思想は、近代教学を形成し、また前回の御遠忌以降、多くの研究者により多様な展開を見せてきた。これらについて教学的問題点を踏まえて、親鸞思想の受容の経緯を明らかにし、現代的な視点から新たな親鸞教学の総合的な確立を目指す研究を行う。

### 3、現代における親鸞思想との出会い

親鸞思想が、グローバルな状況の中でどのよう

な位置づけにあるのか。あるいは他の哲学・思想・異文化などどのような接点を持ってきたのか。その経過と意味を明らかにし、同時に社会的見地からの分析なども行いつつ、親鸞教学の現代的・普遍的意味を明らかにする研究を行う。

### 4、文献目録の作成

親鸞思想に関する研究成果を整理し、資料として活用できるよう文献目録を作成する。

現在、真宗教学はもとより、様々な研究分野から、新しい研究の成果が多くもたらされ、それらは親鸞の思想研究を大きく前進させている。本研究班では、それらの学問的成果を整理し踏まえた上で、新たな視点からの親鸞像を構築し、未来の親鸞研究への展望を開く基礎を提示していきたいと考えている。

## 大学史研究

### 大学史関係資料の 収集・整理・公開

チーフ・助教授 織田 顕祐  
(仏教学)

#### I、本研究の中長期的な目的

『大谷大学百年史』『清沢満之全集』の刊行を経た今、清沢を軸として清沢以前の学寮時代(近世)と清沢以後の大学の歩み(近代)の関係という観点から、これまで個々になされてきた研究成果を集大成する必要があることが改めて思われる。こうした作業を通して、必要文書・文献を収集し、整理・公開していくことは、結果的に更に深く本学の歴史と学事を研究する事になる。その研究の成果として、『大谷大学350年史(仮称)』をまとめる事が中長期的な目的である。

#### II、当面3年間の研究の全体像

本研究班は、2003年度までに行われたいくつかの指定研究を統合する形で、2004年度に始まった。当面の3年間の研究課題は、それまでの指定研究の事後を処理し、発展的に研究の方法論を検討する事である。项目的に挙げれば以下のような課題がある。

- ①『清沢満之全集』刊行の事後処理を終了すること
- ②佐々木月樵研究のための資料調査収集

- ③『百年史』刊行時収集資料の整理と公開
- ④近世学寮学事把握のための基本事項の整理（近世学寮年表の作成）
- ⑤東本願寺教団現代史の調査研究

### Ⅲ、昨年度までの成果と今年度の目標

- ①『清沢全集』のテキストデータベースの修正はすべて終了。未公開清沢満之自筆資料の中の和洋混交資料に着手し、10文献の粗率的な翻刻を終了したので早い時期の終了を目指す。また、『清沢満之記念館』（愛知県碧南市）と共同で、『臘扇記』を注釈し刊行するための研究を開始した。これは2007年中に出版できるよう研究を進める。
- ②『佐々木月樵著作目録』を増補し、資料の収集を始めた。全584文献を確認し、289件を収集した。早い時期に収集を終了し、研究の切り口を検討する。
- ③『百年史』刊行時収集資料のうちの原資料（通称『黒ファイル』）の長期保存のため、中性紙箱・封筒を用意し移管を開始した。
- ④近世学寮年表は明治期中ごろまで進んだ。早い時期の完成を目指す。これと平行して、近世学寮研究の切り口を香月院深励師に定め、著述目録を作成し、本学図書館の協力を得て現物調査を開始した。今のところ香月院師の著述349件を確認し、58件の調査を終了した。引き続き調査を続け、まず著述目録を完成したい。
- ⑤主として東本願寺現代史年表として刊行できるよう資料整理を進めているが、本年度中に何らかの形で研究成果を公開したい。

ル・データベースの構築。

- 海外仏教研究者を招聘しての講演会や研究会の開催。
- 真宗・仏教系国際学会（会議）の企画開催と、宗教系国際学会への研究員の派遣。
- 真宗・仏教関連資料の翻訳と出版。

#### 〔研究計画〕

従来は英語圏を中心として研究活動を行ってきたが、近年は中国やヨーロッパなど、他の言語文化圏へも活動の範囲を拡大している。具体的には英語圏班・ドイツ（フランス）班・中国班・韓国班の4部門である。各言語文化圏それぞれの研究テーマ及び目的は、次の通りである。

#### —英語圏班—

##### 〈研究テーマ〉

- ①諸外国における仏教研究動向の把握
- ②真宗・仏教関連資料の翻訳出版

##### 〈研究目的〉

- ①本学における仏教を中心とした思想研究を推進するためには、国際社会における仏教研究の動向を把握することが重要な課題となる。そのため英語班では、これまで国際学会への研究員の派遣や国際学会の企画開催などを継続して行ってきた。今後も、国際社会に常にアンテナを張り、情報収集ならびに本学仏教研究の発信に努めていきたい。
- ②親鸞の思想を世界に発信することを重要な研究課題の一つとしており、近年はいわゆる「近代真宗教学」の翻訳に取り組んできた。現在はニューヨーク州立大学（The State University of New York）からの出版に向けて最終的な作業中である。また、昨年度は清沢満之の「真宗大学開校の辞」を翻訳した。今年度は、そこに序文を加え『真宗総合研究所研究紀要』に発表の予定である。さらに清沢の他の著述についても翻訳を行う予定である。

#### —ドイツ・フランス班—

##### 〈研究テーマ〉

##### 仏教・他宗教比較研究

- ①「プロテスタント神学との対話」
- ②「近代化された宗教特に浄土真宗の社会学的観点からの研究」

##### 〈研究の目的〉

- ①「プロテスタント神学との対話」  
マールブルク大学神学部との研究交流を中心としながら、浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比

## 国際仏教研究

### 諸外国における仏教研究の動向の 把握と必要資料の整理・収集・公開

チーフ・教授 宮下 晴輝  
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究の成果を公開することを目的としている。この目的遂行のために、これまで受信と発信の両面から、以下のような研究を進めてきた。

○海外における仏教関係書誌の収集・整理と、デジタ

較研究を継続していく。

②「近代化された宗教特に浄土真宗の社会的観点からの研究」

フランス国立高等学院 (EPHE) の宗教社会学部門との交流を開始するにあたり、2006年開催予定のシンポジウム『宗教と近代合理的精神—日仏文化の比較を通して』の開催準備をする。

—中国班—

〈研究テーマ〉

中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化

〈研究目的〉

中国東北地域 (いわゆる満洲) と東部モンゴル地域 (内モンゴル自治区東部) における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料による再構成及び現地調査によって明らかにする。

「満蒙」、すなわち中国東北地域と東部モンゴル地域とでは、宗教の諸相は一変し、仏教においても、前者には中国仏教が後者にはチベット仏教 (いわゆるラマ教) が流布する中に、さらに日本がもたらした日本仏教が一時期存在していたというのが事実であろう。両地域の宗教を併せ監督統御しようとしたのが「満洲国」期であった。しかるに、両地域における宗教についての信頼すべき調査報告はほとんど存在しないというのが実情である。中国側が主たる研究地域としてこなかったことが大きい。日本による戦前の調査報告もまた、実際に伝えているとは言えない恣意的あるいは誤解に満ちたものが多い。これら歴史史料を再検討しつつ、中国側研究者の協力を得て、共同研究というかたちで現地調査を行い、今日的レベルの研究を推進させていくことが本研究の主目的である。

なお、韓国・東国大学校との共同研究は、先方の事情により今年度は休止されることになった。

## 西藏文献研究

# チベット語文献の データベース化

チーフ・教授 福田 洋一  
(仏教学)

本研究課題は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、本年度は具体的に以下の課題に取り組む。

### 1. 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化

#### A. 北京版カンギユルの研究

1930~32年刊行の『甘殊爾勒同目錄』は、本学所蔵の北京版チベット大蔵経 (1717/20) を基軸として、デルゲ/ナルタンの各版はもとより、サンスクリット/パーリの各本および漢訳との勘同をおこなったすぐれたリファレンスであり、出版から70年を過ぎた現在でもその価値は失われていない。本研究班では昨年度より復刊のための準備をおこなってきた。復刊に際しては若干の補訂をおこなう予定である。今年度は昨年に引き続き、補訂必要箇所確定をおこなう。

#### B. 大谷大学図書館所蔵蔵外チベット語文献の研究

大谷大学図書館所蔵蔵外チベット語文献の研究を進めるとともに、テキストを入力し公開していく。本年度は、以前「大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書」として公刊したブムタク・スムバ ('Bum phrag gsum pa Byams pa chos grub, 1433-1504) の『俱舍論語義解明・善説の陽光 (Dam pa'i mngon pa mdzod kyi tshig gi don gsal bar byed pa'i bstan bcos legs par bshad pa nyi ma'i 'od zer)』などに対する研究とテキスト入力をおこなっていきたい。

### 2. Tibetan Language Kit のヴァージョン・アップ

今年度早々に、Unicode に対応したベータ版の公開をおこなう。

### 3. 現地研究機関との提携

前年度に引き続き、西藏社会科学院との共同研究提携締結に向けての交渉をおこなう。

### 4. パーリ語文献研究の終了に伴う、収集資料の整理と研究

タイでの調査時に撮影した文献、特に海外からの問い合わせもある Wat Rachasitharam 寺院所蔵文献についての整理作業の整理・目録化をはかる。

### 5. Web ページの充実

Tibetan Language Kit ヴァージョン・アップ版の公開にともない、現在公開している班の Web ページを大幅に模様替える。班員の紹介や、研究成果の公表を発信する。その際、Unicode を使い、日本語版／英語版は言うに及ばず、チベット語版のページも作成する。

永9)年に宗祖を敬慕する人びとによって東山大谷の地に創設された。以後、御影堂・阿弥陀堂を備えた両堂形式となり、江戸初期の1602(慶長7)年に、徳川家康の寺地寄進を受けて東六条に寺基を定めて東本願寺が創立された。その後、1658~70(明暦・寛文年間)年に改築されて本格建築となったが、1788(天明8)年、1823(文政6)年、1858(安政5)年、1864(元治1)年の4度に及んで罹災焼失し、そのたびに再建されて現在の両堂建築は1895(明治28)年の竣工になる。造営の経過、教化体制、職人組織、部分請負的寄進、門徒参加、などの諸問題について、明治造営の場合に限って幾分か知られてきた程度であったが、今般の研究では、東本願寺が所蔵する数千点の新発見造営史料の利用を通して、江戸期の再建にまで遡って造営史全般に関する研究を行う。新史料の語ってくれるところは極めて多大と期待される。

## 真宗本廟（東本願寺）造営史研究

### 真宗本廟（東本願寺）造営史料の研究並びに 『真宗本廟（東本願寺）造営史』の編纂

チーフ・教授 木場 明志  
(国史学)

真宗大谷派は2011年に宗祖親鸞聖人750回御遠忌を迎える。2000年以来、本山御遠忌本部の記念事業「両堂再建史料の研究・整理・保管」において進めてきた両堂再建を中心とする真宗本廟（東本願寺）造営再建史料の整理点数は数千点を越えており、これらの調査作業は今なお本山内において継続中である。上記の調査作業に並行して、本プロジェクトでは、それらの史料に基づく研究を進める。さらに、その研究成果を世に問うべく、御遠忌記念事業の一端として『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の編纂を進めることを目的とする。歴史・建築・美術工芸・防災などの諸分野に及んで真宗本廟（東本願寺）造営の経験が一般にも生かされるならば、記念事業としての意味は大きい。

特に、信仰史・教団史に加えて建築史の専門研究者を多く加え、真宗本廟（東本願寺）の建築意図・仕様意図などを具体的に描き出し、真宗門徒の帰依処としての真宗本廟の存在意味の確認に寄与したい。

真宗本廟は、宗祖親鸞聖人の示寂後11年目の1272(文

## 2006(平成18)年度「一般研究」選考結果発表

### (A) 共同研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
山本 貴子	研究課題 北里蘭蠟管資料群の分析とその同定：台湾を中心に 研究員 山本 貴子（助教授・図書館情報学） 片岡 裕（教授・情報工学）	150万円
若槻 俊秀	研究課題 法苑珠林の総合的研究 研究員 若槻 俊秀（教授・中国哲学史） 石橋 義秀（教授・国文学） 乾 源俊（教授・中国文学） 大内 文雄（教授・東洋史学） 佐藤 義寛（教授・中国文学） 浦山あゆみ（助教授・中国語学） 采翠 晃（講師・仏教学） 協同研究員 西尾 賢隆（花園大学教授） 稲垣 淳央（本学任期制助手） 本井 牧子（本学任期制助手） 今場 正美（本学非常勤講師） 長谷川 慎（本学非常勤講師） 早川 智美（本学非常勤講師） 福井 敏（本学非常勤講師）	150万円
皇 紀夫	研究課題 仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究 —仏教的教育論の現状分析— 研究員 皇 紀夫（教授・臨床教育学） 門脇 健（教授・宗教学） 関口 敏美（助教授・教育学） 山内 清郎（講師・教育人間学・臨床教育学）	100万円
小谷信千代	研究課題 新発見の安慧『俱舍論実義疏』梵文写本の研究 研究員 小谷信千代（教授・仏教学） 箕浦 暁雄（講師・仏教学） 協同研究員 本庄 良文（佛教大学非常勤講師） 松田 和信（佛教大学教授） 福田 琢（同朋大学助教授）	200万円

### (B) 個人研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
白館 戒雲	研究課題 『量評釈』第2章に対するチベットの註釈の研究—仏道体系の理論と実践— 研究員 白館 戒雲（教授・仏教学）	50万円
古川 哲史	研究課題 日米関係史における日本人とアフリカ系アメリカ人 —第二次世界大戦期までを中心に— 研究員 古川 哲史（講師・歴史学／比較文化・社会論）	50万円
廣瀬 幸市	研究課題 心理療法基礎論の為の基盤造りに向けての基礎研究 研究員 廣瀬 幸市（助教授・臨床心理学）	100万円

このほか、水島見一助教授を研究員とする「精神主義の受容と展開—真人社と同朋会運動—」（補助金100万円）も採択されたが、水島助教授が2006年4月1日付で入学センター長（大学当局員）に就任したため、その任期を終えるまでの間、執行を保留することになった。



## 2006(平成18)年度「一般研究」研究目的紹介

### 共同研究

#### 北里闌蠟管資料群の分析と その同定：台湾を中心に

研究代表者・助教授 山本 貴子  
(図書館情報学)

2005年度、真宗総合研究所一般研究の「蠟管音源のデジタル化：蠟管蓄音機の再現」において、北里蠟管資料についての研究を行った。現時点での蓄音機の精度の検証と、当時の蓄音機の精度の調査、蓄音機の修復、修復の検証を行うことが目的であった。そのため、北里蓄音機と同型の蓄音機を購入し、1900年代初頭の蓄音機が、現在どの程度の精度を保っているかを実験・検証した。また、北里蠟管資料自体の状態について、台湾関係を取り上げ、詳細に調査した。さらに、北里蠟管について聞き取り調査を開始した。これらの研究成果について、今年10月4日～7日に東呉大学で開催された“2005 The International Forum of Ethnomusicology in Taiwan”において講演し、台湾政府から表彰された(14頁参照)。

しかし、現段階では、当時の蓄音機の精度と同程度のレベルまでの修復が行われていない。現代の技術で作成した部品に交換し、作成された当時の再生品位となるように作り直した後、その修復後の再生品位を検証する必要がある。劣化した蠟管を再生すると、蓄音機の針や振動版も破壊される。劣化した蠟管を再生する限り、修復も必要となる。

一方、北里闌博士は、蠟管の録音状況を記録した図書を数冊出版している。それらの図書には、録音内容などのほかに、交通手段や衣食住を含めた風俗・習慣などが、録音した順に克明に記録されている。また、北里闌博士のことはや現地の人たちのことばも、当時の発音をカタカナに置き換えたものが書き残されている。蠟管の音声とカタカナに置き換えられたものが一致すれば、80年前の音声は、録音した人の名前とともに甦ることになる。中でも、音声を録音した人たちの顔については、全員の写りが含まれていると考えられる。北里闌博士の蠟管の情報を同定識別するにはこれらの資料の分析を欠かすことができない。北里闌博士の蠟管は、台湾の原住民族の音楽史上、最古である可能性がきわめて高い。可能な限

り正確に再現できれば、民俗学的、民族音楽学的、社会的、地理学的な価値としてはきわめて高いものとなる。

そこで、本研究では、まず、蓄音機を修復し、蠟管の音声を高精度で再生し、それを高品位でデジタル録音する。次に、海外の研究者とともに録音された音声を分析し、その音声、テキスト、画像を同定識別して、データ間を完全に結びつけることを目的とする。さらに、北里闌博士が民俗学・社会学の基本研究手法を得たと推測される、ドイツでの研究の調査を行う。これによって、北里闌博士の蠟管文書の価値が定まる。

なお、蠟管は全部で約240本ある。本研究期間である1ヵ年ではすべてを再生・録音・分析することは不可能である。従って、本研究では、台湾のパートのみを取り上げる。

### 共同研究

#### 法苑珠林の総合的研究

研究代表者・教授 若槻 俊秀  
(中国哲学史)

『法苑珠林』一百巻は、中国にもたらされた仏教の世界観を含めて丸ごと伝える仏教類書として、日本仏教の淵源でもある中国仏教を、全体として考えるときの、宝庫であるとされているものである。

そこには、今は佚してしまった翻訳經典や、中国で作られた偽經が保存されていたりして、漢訳仏典や、中国仏教学、仏教史の研究に貴重な資料を提供したり、また文学の分野からも説話、伝奇類の宝庫として利用すべきものが多い。なかんずくわが国においては、『今昔物語集』震旦の部に本書を典拠とするもの、あるいは関連するものが数多くあり、長い間大切に読みつがれてきている。

本書は、仏教類書として大部のものであり、将来的には全体の構成についての撰者の意図等についての精密な検討を行わねばならないのであるが、今回はそのことを念頭におきつつ、特に本書に所収される『冥祥記』に研究対象を絞り、全130余話について全文の校訂、訓読、

語釈をまずは実施し、学界に公表することを期するものである。なお、古く魯迅は『古小説鈎沈』で『冥祥記』を収録し、評点を施し、配列を整える等を行っているが、それには幾つかの問題があると思われるので、それを校訂しつつ、本来の『冥祥記』の姿を考えてみたい。

ところで『法苑珠林』について、既に幾つかの解説、訳注が部分的なものではあるが刊行されている。ただし語注などに考察を加えた記述もなされているが、全面的な訳注、検討という点については不十分なままである。

本研究では、その点について着実な考察を加えて、中国仏教説話の基本的な資料として、確かな底本となり得るようなものとして世に問えることを期している。

既に過去一年間、本学研究所の支援を得て毎週一回の研究會を続行して、本書の基本的な性格、説話の位置付け等を踏まえる検討、会読を行ってきた。その場合の各分野の研究者から意外の見解が提出される等を通しての新知見が多く得られた。この点についてはいずれ「研究所研究紀要」等を通して報告する予定である。

## 共同研究

# 仏教と教育の関係性に関する 哲学的・臨床的研究 —仏教的教育論の現状分析—

研究代表者・教授 皇 紀夫  
(臨床教育学)

こころの時代の心の教育は深刻化する教育の危機に対処する切り札であるかのように、ここ10年来、教育関係者や宗教関係者の関心を惹いてきた。

近代公教育制度の成立以来、学校教育と宗教の関係は、信教の自由の理念に基づき機能的分離を原則とすると同時に、この理念に従い宗教への寛容の精神の育成と私学における宗教教育の自由が強調されてきた。ところが最近では、心の教育論に便乗し、学校教育と宗教との性急かつ無原則な関係づけを主張する議論もある。

本研究では、心の教育という正体不明な教育論に安易に与することなく、なおかつ《心の教育》を重要な哲学的教育学的実践課題として探求することを目指す。対症療法的な心の教育に回収されない、真実度の高い《心の教育》の所在と役割意味とを解明し、その具体相をイ

メージ化できる地点に到達したいと考えている。

仏教と教育の関係性について、従来の研究の一般的傾向は、仏教的な根源語によって教育を語る言わば《仏教》的教育論が主流であった。教育学にとっては難解な専門用語からなるこの種の教育論が、近代的な人間観に基礎づけられた教育言説と果たして交差しているかどうかは定かでない。むしろ一方的な依存関係によって教育の意味が隠蔽されている可能性もあることを見逃すべきではないだろう。

本研究は、上述の問題意識において、仏教と教育の《関係性》が成立する場面や次元、その具体相の開明を目指す。そのため、本研究では以下の三点の課題と方法を設定する。

第一に、教育言説の物語論的レトリック論的な研究方法を發展させて、仏教言説における教説を言語論的形態として対象化し、それらを仏教的真実の表現と伝達のための言語的な仕組みと語りの技法に見立て分析すること。

第二に、仏教と教育の関係性の現状に関するフィールド調査と仏教教育言説の分析。《仏教》的教育や心の教育論において、仏教と教育の関係性がいかに設定されているかを、仏教系の教育機関を対象に調査し、仏教と教育の関係性の語りの形態を分類し、その特性と問題点とを明確にしたい。

第三に、仏教と教育の関係性の可能的形態を具体的な教育実践において構想するプロジェクト研究。そのねらいは、従来の自己完結型の《仏教》的教育論とは異なる、しかし対症療法的な心の教育論ともはっきりと識別できる「真実性」の高い仏教的教育（いわゆる《仏教》的教育ではない）を構想することである。

## 共同研究

# 新発見の安慧『俱舎論実義疏』 梵文写本の研究

研究代表者・教授 小谷信千代  
(仏教学)

本研究は、近年発見された『俱舎論実義疏』のサンスクリット写本を校訂出版することを目的とする。

『俱舎論実義疏』は、およそ六世紀頃のインドで安慧によって著された『俱舎論』の注釈書である。その内容

の詳細さや分量の膨大さは、称友の『俱舎論明瞭義』をも凌ぐほどで、最も重要なアビダルマの注釈書のひとつである。言うまでもなく『俱舎論実義疏』の解説は、アビダルマ研究の分野に大きな進展をもたらすこととなる。

『俱舎論実義疏』には、チベット大蔵経各版本の論疏部中、雑部に収められているチベット語訳と、漢語から翻訳された古代ウイグル語写本と、チベット語訳からのモンゴル語訳、また、北京図書館に所蔵されており蘇軍によって公表された敦煌出土の漢語断片、そして、パリ国民図書館に所蔵され、『大正新修大蔵経』に収録された敦煌出土の漢語断片がすでに知られている。チベット語訳およびモンゴル語訳は完本であるが、それ以外は部分的に残存するものであったり、抄訳あるいは備忘録ではないかとも推測されてきたもので、いずれにしてもチベット語訳と厳密に対応するテキストではない。サンスクリット文に最も忠実であろうと考えられるチベット語訳も、当時のチベット語訳者が当該コロフォンにおいて言及している通り十分な翻訳とは言えず、またチベット文が難解であることも手伝って、今日まで部分的な解説研究がなされてきたにすぎない。よって、サンスクリット写本が現存する『俱舎論明瞭義』の解説研究が進み、その全体像がほぼ明らかになった今日では、チベット語訳でしかその全体像が知られない安慧の『俱舎論実義疏』や満増の『俱舎注疏随相』の解説は、今日の研究状況に照らして必要不可欠の課題なのである。

このような状況下、近年ウィーンの Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Sciences と、北京の中国蔵学研究中心との協力によって、『俱舎論実義疏』のサンスクリット写本を参照することが可能となった。そこで、仏教写本の解説を専門とする研究者と、アビダルマ文献研究を専門とする研究者とが共同で研究プロジェクトを立ちあげ、当該写本の校訂出版を目指す。具体的には『俱舎論実義疏』サンスクリット写本を解説し、最終的にはそれを Diplomatic Edition ならびに Critical Edition として出版する予定である。

## 個人研究

# 『量評釈』第2章に対する チベットの註釈の研究 —仏道体系の理論と実践—

研究代表者・教授 白館 戒雲  
(仏教学)

インド大乘仏教の因明の大成者ダルマキールティの著『量評釈』全4章にはインド撰述の幾つもの註釈があり、チベット撰述の註釈にも重要なものがある。本研究では、チベット撰述の中で最重要の、ツォンカバの法嗣ギャルツァブ・タルマリンチェン (Dar ma rin chen, 1364-1432) による註釈『解脱道作明 Thar lam gsal byed』第2章「量 (認識基準) の成立」を、全訳研究する。それにより、遅れがちであったチベット撰述の因明文献に対する研究基盤を作り、伝統的因明研究の重要な部分を解明することを、目的とする。

『量評釈』はディグナーガの著『集量論』の評釈であり、その第2章は、『集量論』の帰敬偈において仏世尊こそが解脱の希求者にとって量 (認識基準) だとされるのを承け、それに表わされた仏世尊の特性の解説を通じて、そのことを論証する。『集量論』や『量評釈』のインドの仏教や外教への大きな影響は周知のとおりであるが、チベットでは因明は世間的な学問だという評価もありつづけた。ツォンカバは中観哲学をこの論理学により基礎づけたが、『量評釈』第2章は、世尊の救済性や修習されるべき道の次第の説示を通じて、小乗、大乘の要点すべてを包摂していると理解した。これを承けて完成された註釈が『解脱道作明』である。インドの諸註釈を踏まえた考察が展開されており、ラサ版で400枚を超える大著である。四聖諦の了解によってのみ解脱があるとし、慈悲による行為を仏世尊の本質とするなど、思想的にもきわめて興味深いものがある。

因明はチベット学問寺の主要5科の一つであり、ゲルク派では『量評釈』とともに『解脱道作明』が根本テキストとなったので、チベット、モンゴルで広く研鑽され、同書に関する著作も多く作られた。20世紀初めの近代仏教論理学研究の創始者、スチエルバツキーもこの系統から学んでいる。

『量評訳』第2章とそれに対する『解説道作明』は国内国外で研究が進められ、前者には日本語、後者には英語での全訳は与えられている。本研究では、筆者自身の承けた伝統的教學に基づきながら、精密な全訳を提示すること、語義の説明にはインドの諸註釈や後代のゲルク派の解説書を多く参照すること、解釈についてはツォンカパのもう一人の高弟、ケードゥップ・ジェによる註釈『正理海』を対比することを、目指している。

## 個人研究

### 日米関係史における日本人と アフリカ系アメリカ人 —第二次世界大戦期までを中心に—

研究代表者・専任講師 古川 哲史  
(歴史学／比較文化・社会論)

本研究は日米関係史のなかで、幕末期から第二次世界大戦期までの期間において、日本人とアフリカ系アメリカ人（アメリカ黒人）がどのような関係や交渉をもち相互影響を与えたかを実証的に明らかにすることを目的とする。

日米関係についての研究は第二次世界大戦以前からあり、戦後はとくに数多い。しかしながら、その圧倒的多数は日本（人）と「マジョリティ」であるホワイト・アメリカ（白人優位の社会）との関係を扱ったものであり、「マイノリティ」であるアフリカ系アメリカ人やその社会とのかかわりを論じたものはわずかである。筆者は2004年6月、共著で『日本人とアフリカ系アメリカ人—日米関係史におけるその諸相』（明石書店、553頁）を刊行した。日米における15年にわたる共同研究の成果であり、この分野での先駆的業績との評価も受けた。しかし、「百科全書」的構成になった分、十分に調査や議論できなかった点も多く残った。まったく言及できなかった事象や問題もある。

したがって、本研究では戦前・戦中期の両者の関係を再度、概観した上で、その関係や相互影響をより詳細に調査し、歴史的に明確にする。そして、戦後から現在にいたる日本人とアフリカ系アメリカ人の係わりの現状や課題を論じる際の土台も提供したいと考えている。

本研究は国際的視点から見ても、日米関係史やアメリ

カ研究における未開拓なテーマあるいは十分明らかにされていない課題に取り組むものである。たんなる「正史」の補充にとどまらず、歴史的な新事実の発掘と解釈をもたらすであろう。さらには、近年の日本人政治家の「人種差別発言」や日系企業の雇用差別問題などから、しばしばごくしゃくしがちな日米関係の修復作業への貢献、よりよい日米関係理解のための学術的、社会的貢献となることも目標としたい。

## 個人研究

### 心理療法基礎論の為の基盤 造りに向けての基礎研究

研究代表者・助教授 廣瀬 幸市  
(臨床心理学)

本研究は、心理療法を新たな視点から捉え直そうとする心理療法基礎論構築のための基礎研究である。本研究を含む全体構想は、将来の心理臨床学の研究方法論にも及ぶような心理療法基礎論を提案することである。そのような全体構想のうち、本研究では、その端緒的研究に取り組むことにする。

臨床心理学が輸入される経過とその後の学問的議論の未成熟段階での限界から、我々心理臨床実践家は、理論に潜む暗黙の諸前提と、臨床現場で得られる知見との間に生じていた、架橋困難な間隙に悩まされてきた。本研究では、この原因を西欧近代思想の暗黙に前提とする主客二元論という根源にまで遡及した上で、我が国における心理臨床実践に資する学問的視座を探求しようとしている。

本研究の眼目は、大まかに言うと、次の3点に纏められる。①本研究での心理療法論が複雑系の自己組織性論に基づくこと、②心理療法を記述する際の視点が内部からのものとなっていること、③新しい心理療法基礎論の根拠となるのは相関存在論になること、である。このように、本研究の特色は、従来の臨床心理学が取り扱ってこなかった、他領域の知見を可能な限り持ち込んだ上で、心理臨床学に特有の事情に適応させるべく、学術的な検討を行っていることである。

本研究は、申請者が2005年に学位取得した論文『意識・存在フィールドについての心理臨床学的考察』での研究が下敷きになっている。したがって、社会科学に近

年導入されてきた新しい概念を、単に臨床心理学に翻案・導入するものではなく、申請者が「場所論的心理療法モデル」で既に提案している視座を基にしながら、心理臨床現場ならではの知見を得ている心理臨床家が自らの拠って立つスタンスを省みることで新たな発見をするような、そのような視座を開発しようとする試みである。

このような新しい視点からの心理療法再考は、不可避免地に従来の心理療法理解に認識的転換を迫ることとなり、必然的に概念的転換が要請されることとなろう。そのような提案が理解を得るためには、長期の啓蒙活動を必要とするものと予想され、長期的展開に先行して、初期段階の探索的な基礎研究を立ち上げるのが是非とも必要である。本研究において、根本から心理療法を問い直すことは、畢竟するに宗教と心理療法とのつながりを改めて考究することとなり、更に、社会科学の最新知見から心理療法を捉え直そうとする試みによって、社会学を始めとする他領域の学問とも捉え方・考え方を共有できる地平を探ることができるかも知れないと考えている。

## 学会参加報告

# 台湾政府による表彰と2005 The International Forum of Ethnomusicology in Taiwan での発表

人文情報学科・助教授 山本 貴子

2005年10月4日から7日まで、台湾の東呉大学で2005 The International Forum of Ethnomusicology in Taiwan が開催された。この国際フォーラムから本学人文情報学科の片岡裕教授と山本貴子助教授が招待され、台湾政府より表彰されたので、以下に詳細を述べる。

片岡と山本は、真総研データベース班などで、数年にわたって北里闌博士の蠟管蓄音機の精度調査、蓄音機の修復とその検証、北里闌博士についての調査と彼が残した資料の分析などを行い、特に台湾で録音された蠟管の高精度再生を試みてきた。

北里闌博士(1870-1960)の蠟管・資料とは、日本語起源の研究のため、博士自らが1920年から1931年まで国内(沖縄、東北、北海道、樺太)および海外(台湾、フィリピン等)で、外国語の影響を受けていない純粋な方言や音楽等を録音した蠟管と、録音時の写真、文献の全体である。本学には、オリジナルの蠟管が約220本と、博士が記録と再生に使用した Edison 式蠟管蓄音機2台、自費出版された写真を多数含むフィールドノートが存在する。写真および詳細な録音記録文書付きの蠟管は、世界的に稀で、資料価値は計り知れない。

一方、2003年、東呉大学の呂教授(Dr. Lu, Yu-Hsiu)は、北里蠟管を尋ねて来学し、それ以降、我々とコンタクトを取っていた。そして、2005年5月、この国際フォーラムのディレクターとなり、フォーラムでの発表の招待と表彰状の授与の連絡があった。

真総研データベース班のチーフであった草野顕之教授と相談した結果、片岡と山本が参加することになった。また、北里蠟管の音声分析には、現在使用されている少数民族のことばや音楽などと比較する必要があり、録音する機会を捜していた。呂教授に尋ねたところ、いくつかの少数民族の集団もフォーラムに参加し実演すること、それらの人々のことばや歌などの録音も計画した。

フォーラムへの招待を受けると決まった途端、3,000文字と500文字の2種類の梗概や、20,000語の論文、キーワード5つとそれぞれ200字ずつの概要、自己紹介文などが要求され、9月ごろまでひたすら執筆作業が続いた。

資料も機械類も大学にあるので夏休みも研究室で作業していると、山本のPCのハードディスクが壊れて修正した全データが消えたりディスプレイが壊れたりし、教育研究支援課には非常に世話になった。

国際フォーラムの正式な日程は10月4日から7日までであったが、3日にはリハーサルと記者会見、半日の市内観光が、8日には後援者である National Center for Traditional Arts (NCTA) のホールを使ったコンサートがあり、全日程を参加することにした。

参加に当たり、問題が生じた。まず、手荷物である。東呉大学から蓄音機を持ってきてほしいという要請があったので、飛行機に手荷物として持ち込もうとしたところ、重量と大きさの関係上、もう一席購入しなければならないと言われた。これについては、呂教授からのエバー航空への協力依頼で解決した。

次は、プロジェクトであった。発表用と現地でのコンサートの録音用に、片岡が特別仕様のノートPCをHP社に発注した。発表用の画像を高精度で再生するためには、予め発表会場で使われているプロジェクトの解像度に合わせて画像を作っておく必要がある。その仕様を東呉大学に問い合わせたが答えが返ってこなかった。そこで、日本HP株式会社に協力要請したところ、HP台湾オフィスが、高解像度プロジェクトを発表会場に取り付けてくれることになった。HP各社には、深く感謝の意を表す。

最大の問題は、出発前日に起きた。台湾に台風が接近したのである。我々の飛行機は、本来、関西国際空港を13時発、台湾へは14時50分着の予定だったが、出発は21時5分と遅れ、現地到着は22時55分となった。到着後、大学の送迎バスでホテルに向かうところ、他国からの参加者が全員揃うのを待ったため、最後のマダガスカルからの到着は午前0時を過ぎ、ホテルのチェックインは午前1時を過ぎていた。

ホテルから大学まで少し距離があり、毎日、大学の送迎バスが往復してくれた。ありがたい話ではあったが、朝8時半に迎えがあり大学発は夜9時で、毎回往復とも点呼が取られたので、結局、ほとんど大学内で過ごす事

となった。

2日朝もバスに乗り、9時前に大学に到着後、すぐにリハーサルを開始した。カナダで録音の仕事をしている方が台湾に帰国され、当フォーラムでは技術指導に当たっていた。その方を交えてのリハーサルにより、音声・画像とも多少の修正で再生できることが確認できた。

午後1時過ぎから学内の Entertainment Square で記者会見が行われた。研究者としては我々2人、他にはコンサートを行う民族音楽家たちが出席した。我々の研究については、片岡が蠟管蓄音機を使って実際に古い音声を再生して解説した。ここに掲載した図1・2は8月3日付けの『中国時報』と10月4日付けの『聯合報』の記事である。



図1 中国時報



図2 聯合報

記者会見の後、駆け足の市内観光で、夜は、芸術系学部のキャンパスでレセプションがあった。

10月3日朝9時から Entertainment Square で表彰式が行われた。最初、呂教授などの研究チームが調査した少数民族についての映像を鑑賞した。そこには、北里博士が撮影した写真を見せられた人が「知人のお母さんだ」と話す様子や、博士が写した景色と現在の様子をオー

バーラップしたものが映されていた。表彰式には、台湾政府の代表として Mr. Wu, Jinfa (Vice President of Council for Cultural Affairs, Taiwan)、Ms. Fang Jy-Shiuh (Deputy Director of NCTA)、東呉大学の学長などが出席された。我々は、Mr. Wu, Jinfa に北里蠟管の中で保存状態の良い3曲を音楽CDとしたものを進呈し、表彰状を頂いた。式典は30分程度で終了し、その後会場を移動してセッションが開始された。



図3 表彰式1



図4 表彰式2

フォーラムの会場は、東呉大学内の国際会議場だった。当日の新聞にも大きく取り上げられたので、300人程度収容できるホールが満席で、後で聞いたところによれば、立ち見が出たということだった。我々の発表は Session 1で、“Special Reports of Dr. Kitazato’s Wax Cylinders”と名付けられ、9時50分から12時（まず、議長による紹介が5分あり、発表時間は片岡、山本が40分ずつ、各発表者に二名ずつ用意されていた討論者との質疑応答が15分ずつ、フロアとの質疑応答が7・8分ずつ：二人で15分）だった。

片岡の発表内容は、蠟管及び蠟管蓄音機の特長、北海道大学が行った北里蠟管の録音と我々の録音との比較分

析、蠟管及び蠟管蓄音機の保存と修復方法についてで、実際に蠟管蓄音機を再生させて説明を行った。山本の発表は、北里闌博士の調査方法と北里蠟管の内容、北里蠟管・北里博士の文献・画像の三種類を組み合わせることの重要性についてであった。前日のリハーサルにも拘らず、最初に音声が出ないなどのハプニングに見舞われたが、無事発表が終了した。フォーラム開催期間中、中国語／英語の同時通訳が入り、必要な人にはイヤホンが貸し出されたこともあって、多くの質問が出された。また、発表終了直後に、数十人の聴衆が質問やコメント、今後の予定について話しに來られ、関心の高さが窺えた。

午後からは、夜のコンサートに備えて機器類のセッティングを行った。このフォーラムは、毎年各国から民族音楽の演奏家を招待して、開催期間中、素晴らしいコンサートを開いている。マイク2本とマイクアンプ、その他、片岡が製作した機器類を使って正確なステレオ録音を行った。

4日は、午前中、フォーラムに参加した後、午後からNCTAへ行き、Ms. Fang Jy-Shiuhと、北里蠟管を録音した後の利用方法など今後の方向性を話し合った。

5日の午前中、少数民族であるヤミ族の人たちの歌や話し声を録音した。残念ながらスタジオが使えず、環境音が入ってしまったが、自然な会話も記録でき、超高精度での貴重な録音となった。

このように、朝、フォーラムへ参加した後、夜、コンサートを録音しホテルに戻って編集するという、有意義ではあったが非常に忙しい8日間であった。往路とは違って復路はほとんど問題なく、10月9日正午に関西国際空港へ到着した。

最後に、今回の国際フォーラムの参加に当たっては、さまざまな方にお世話になった。

日本HP株式会社、エバー航空、また、呂教授もさることながら、呂教授の御尊父には個人的にもお世話になった。また、東呉大学のスタッフの皆様、お手伝いしてくださった学生の皆さん、最後に、大谷大学の図書館・博物館の皆様にも深く感謝いたします。



# 全国大学史資料協議会2005年度総会ならびに 全国研究会参加報告

大学史研究 研究補助員 日野 圭悟

本報告は2005年10月5日から7日まで、慶應義塾大学と日本女子大学成瀬記念館にて行われた全国大学史資料協議会2005年度総会ならびに全国研究会の参加報告である。全国大学史資料協議会とは大学史編纂や大学史資料を取り扱う部署の担当者同士の研究と交流を目的とした会である。大学史研究の前身である真宗学事史研究以来、本研究班はこの全国大学史資料協議会(西日本部会)に所属し、大学史の編纂、また大学史に関する資史料の収集・整理・保存・公開などについての研鑽を深めてきた。

本研究班が大学史資料を取り扱う仕事、意義について、本報告の前に少し紹介したおきたい。大学史研究は前身の清沢満之研究と真宗学事史研究の行ってきた研究成果を引き継ぎ、大学史に関しては特に大学史編纂事業(『大谷大学百年史』、『資料編別冊 戦時体験集』など)の研究成果を引き継ぎながら、研究をすすめている。本研究班にとって、大学史編纂の過程で、学内事務から移管された多くの資料の整理も課題の一つとなっている。たとえば、明治・大正期の資料については中性紙で作られたアーカイバルボードの箱に入れ替えることで資料の劣化を防ぎ、保存・活用を図っている。こうした本研究班の作業の推進のために、大学史資料協議会への参加によって多くのノウハウとネットワークを得てきているのである。

一日目 2005年10月5日(水)

会場：慶應義塾大学三田キャンパス東館8階ホール

(大会議室)

2005年度総会

講演：小室正紀氏(慶應義塾福澤研究センター所長)

「近代日本研究と福澤研究センター」

講演：西澤直子氏(慶應義塾福澤研究センター助教授)

「『150年史資料集』編纂作業と資料整理」

見学：(重要文化財「旧図書館」、「三田演説館」)

情報交換会

慶應義塾大学三田キャンパスの東館8階のホールに会

員校の担当者が全国から集まった。今回の全国研究会は49校、88名の参加校・参加者を得た。会長校である中央大の松崎彰氏より挨拶の後、総会で東西両部会の2005年度の事業計画の報告が行われた。協議会のホームページを作り、各大学の担当部署のホームページをリンクするようにすることが進められていることが注目されることであった。協議会が編集した『日本の大学アーカイヴズ』(京都大学学術出版会)が刊行されて、一つの基準が出来た。今後、日本の学術・思想界で大学の持つ資料・情報・知がますます活用される方向になる。その際、大学史資料協議会が果たすネットワークが大きな意味を持つことは間違いない。

総会の後、慶應義塾福澤研究センター所長の小室直紀氏の講演、「近代日本研究と福澤研究センター」が行われた。福澤研究センターの特色を語られた。センターの性格は単なる大学史ではなく、慶應義塾全体(幼稚舎から大学まで)を含む塾史の編纂・研究施設である。また、資料の収集のみではなく、近代日本思想の研究機関であることが特色である。自校史教育も所員が担当している、というものであった。

自校史教育は昨年度全国研究会での京都大学の西山伸氏の発表の中でも指摘があったことだが、近年、大学への帰属意識(アイデンティティー意識)が薄れており、ますます重要性を増している。

大学史の機関は京都大学のように日本で唯一の「大学アーカイヴズ」(大学文書館)として独立してあるものから、事務機関の一部署であったりするものまで、各大学によって様々である。京都大学を含む旧国立大学は情報公開法の施行に伴い、情報を公開していく義務が生じているため、積極的に大学文書館機能を捉えているが、中でも京都大学の取り組みは熱心である。自校史教育のみならず、レストランの設置や大学文書館の設置なども全学的に連動して行われている。

会場校の慶應義塾大学の場合は、大谷大学と同様に古い歴史を持つ私立大学であるものの、規模・常勤スタッフの有無・学内での位置づけ・文書館機能の成熟度などを含め、本学とは大きな違いがある。しかしながら、現

況の本学での大学史認識・文書館機能・研究班の位置を考えると、大学文書館機能を含む「近代日本思想の研究機関」として位置づける慶應大学のケースは今後の参考になると思われる。

次に、同じく、慶應義塾福澤研究センター助教授の西澤直子氏の講演、「『150年史資料集』編纂作業と資料整理」が行われた。所長の講演を受けて、より具体的なセンターの機能を紹介された。センター所蔵資料の性格、資料の受け入れ作業、『150年史資料集』編纂作業と資料整理という講演内容であった。今後の課題として挙げられているうちの一つに非現用文書の収集に関して、学内に文書規程がないため、強制力が無く、収集を十全に行えないという状況があり、今後の規定作成が課題となっている。閲覧・レファレンス（参考調査業務）は手間がかかるが重要視している、という報告であった。

講演内容が実務に基づいていたために、参加者との間で積極的な質疑応答がやり取りされた。

二日目 2005年10月6日(木)

会場：慶應義塾大学三田キャンパス東館8階ホール

(大会議室)

報告（年史編纂）：田淵正和氏（日本大学）「日本大学の年史編纂事業と日本大学資料館設置準備室の設置」

報告（閲覧・レファレンス）：

谷本宗生氏（東京大学）「東京大学史料室の閲覧及びレファレンス対応」

報告（展示）：小枝和弘氏（同志社大学）「同志社関係資料と Neesima Room」

総括討論

全国研究会二日目、一番目に日本大学の田淵正和氏の報告、「日本大学の年史編纂事業と日本大学資料館設置準備室の設置」が行われた。年史編纂の沿革、資料館設置準備室の設立についての報告内容であった。組織論が問題となる。大学史編纂が終わった後の収集資料の整理・保存は全ての大学において問題となることであるが、日本大学では、大学史編纂の部署と大学史資料館の部署との引継ぎの段階にある。その引継ぎの過程で、大学史の機関の運営上の問題があった。過去、資料の散逸によることをはじめ、大学史の編纂が中止となった大学のケースが存在する、という報告がなされた。

昼食後、東京大学の谷本宗生氏の報告、「東京大学史料室の閲覧及びレファレンス対応」が行われた。通常業務の紹介、大学史資料の整理・収集、レファレンス、大学史の調査・目録作成などについて報告された。史料

閲覧が年間100名、レファレンスが年間200件ある。研究者、マスメディア関係から多く質問が来る。レファレンスに関しては専任の室員が対応する。レファレンスは参考文献を紹介し、また当該部局へ照会を願う。啓蒙的な意味でも、レファレンス対応は大学史一般のことにでも対応するようにしている。蓄積はQ&Aとして、図書館、博物館で共有している、という報告がなされた。

各部局との関係について、京都大学の西山氏より質問があった。集中型というアーカイブズを設立した京都大学と各部局で処理する分散型の東京大学とは理念が異なることについての質問であった。

次に同志社大学の小枝和弘氏の報告、「同志社関係資料と Neesima Room」が行われた。資料展示の活動は「大学のアイデンティティの再確認」のために行っている。それは浮いた言葉ではなく、歴史的な事柄に基づくことが大事である。つまり、現在の校舎の名前を参照したりするなど、過去と現代を結ぶような展示を行い、資料のネットワークを広げることを意味する。また、各部署が何が資料かわからないという認識に対して、資料の展示というのは資料の方向付けを提示することが出来る、という報告であった。展示活動は大学史機関の存続に関わる問題という意見が質疑の中で出た。

三日目 2005年10月7日(金)

会場：日本女子大学成瀬記念館

見学会：日本女子大学成瀬記念館、常設展示および企画展「スポーツの秋！日本女子大学の運動会」、成瀬記念館分館、成瀬記念講堂

三日目は日本女子大学成瀬記念館を見学した。大谷大学の前身である真宗大学と同様に、また巣鴨に近い目白に建学された大学である。成瀬記念講堂、成瀬記念館、成瀬記念館別館を拝見した。大学史資料協議会に所属しているご担当の方による紹介のため、単なる「史跡見学」に止まらない、建設的な見学となった。展示に関しては、成瀬仁蔵が生前用いていたものが多く展示してあった。理科系教育課程があることにもうかがえるように、「女子を人間として教育する」という理念を持つ大学の強い個性が感じられるものであった。また、展示されていたスポーツという事柄に関して、一日目において専修大学の宇野武氏より質問があった。大学スポーツは大学の広報機能として大きな位置にあるが、それを大学史の中でどのように検証されているのか、という質問であった。教員による研究・教育のみではない、学生の多様な活動をも含む視点を持つことが自らの大学の特色を自覚し、より豊かな大学史を叙述するのに役だつことが

わかった。

多くの話題があり、大きな刺激を受けた大学史資料協議会の全国研究会であったが、次のことが感じられた。現況の大谷大学は総合学術センターとしての響流館の建設により、図書館・博物館・総合研究室などの整備が整った。また、開放セミナーや紫明講座などを積極的に実施し、大学に所属する学生以外にも門戸を開き、多くの方が出入りする大学となった。その際、学外に開かれた事業、特に博物館が担う展示機能は、大学のアイデンティティーを伝えるという大きな意味をもつ。その展示される資料の整理・保存・公開を支えるのが、本研究班の担う大学史の認識と大学文書館機能である。大学史の認識については『大谷大学百年史』などの刊行で共有の基盤ができた。また、近世学寮の視点や大正期の京都移転、戦後の大学の歩みも踏まえた大学史観の練り直しも進めつつある。しかし、大学文書館機能はいまだ不十分である。大学史研究で進めつつある資料整理・保存・活用の重要性を事務各部署をも含めた全学的な共通認識をもつことが大きな課題である。このことが、私が大学史資料協議会の全国研究会に参加して感じたことである。

## 特別研究員研究成果報告

# ツォンカパの空思想における基礎理論

広島修道大学 非常勤講師 野村 正次郎

インド・チベットの仏教思想史を語る上で、チベット仏教最大宗派ゲルク派の創始者であるツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357-1419) を避けて通ることはできない。しかしながら従来のツォンカパ研究は、彼の中観思想にのみ研究の主要な視点がおかれ、彼が体系的にどのような空思想を位置づけ、それが基本的にどのような構造をしており、その本質的な特徴がどこにあるのかという点をそれほど注目してきたわけではない。平成15年度より従来取り扱われたことのない彼の空思想の形成上本質的と思われるトピックを考察し、既にその成果の一部はいくつかの場で発表したが、ここではそれらを総括し、それらに対する研究を通じて得られたツォンカパの空思想の基礎理論を概括し、その全体像を紹介しておきたい。

ツォンカパは、カダム派の伝統に則り、釈尊の教えそのすべてが矛盾のないものであり、ひとりの人物が来世の安楽を望み入門したのちに仏に至るまでの「道次第」の体系を説くものであるとする。そのなかでも輪廻の苦海から脱したいと思う「出離心」(nges 'byung)、一切衆生をこの輪廻の苦海から解脱させるために自ら一切相智の位を目指す「菩提心」(byang chub sems)、あらゆる煩惱の根源である無明を断じるための対治たる「正見」(yang dag pa' i lta ba) という三つの枢要が修習された後に成仏することができるとしている。

ツォンカパの空思想とは、この三つの道の枢要のうち「正見」にあたるものであり、諸仏たちがこの世間に出現された最終的な目的もこの空思想を説き、衆生を解脱させるためであるとし、仏教の心髄は、縁起であり、空であるとしている。そして彼は空性に関して伝統的に思想的深度の異なる四つの異なる見解があるとしている。それは経量部の微細人無我、唯識派の空思想、自立派の空思想、帰謬派の空思想の四つあるが、彼はそれらの異なる空思想はすべて論理構造上は同じものでなければならぬと考える。何故ならば、それらは見解が異なっているけれども彼が考える空性の基本構造から逸脱するものではなく、すべての学派の空思想は、あくまでも輪廻の根源たる俱生起の無明と把握形式が直接対立するもの ('dzin stang dngos' gal) として想定されていると

するからである。

ツォンカパの空思想の基本的構造は「空の基体 $x$ は否定対象 $y$ について空である。何故ならば $z$ であるからである」というひとつの命題のみによって形成される。しかるに彼の空思想に関するあらゆる言明は、空の基体 (stong gzhi chos can)  $x$  に関するもの、否定対象 (dgagbya)  $y$  に関するもの、空性の命題を成立させる論拠となる  $z$  に関するもの、更にこの命題を計量する正理知 (rigs shes) に関するものという枠組みをいささかも超えるものではない。またツォンカパは否定を「知やことばによって否定対象を直接否定排除した後に理解される対象」であると定義し、空に関する命題「空の基体 $x$ は否定対象 $y$ について空である」におけるあらゆる規定は、その命題が実行される以前に、既にア・プリオリに決定されているとしている。これをツォンカパは「否定対象の確認」(dgag bya ngos 'dzin) とよび、空性を確定する前段階として、空性の知とは直接対立する否定対象を捉える知が否定対象を如何に把握しているのか、ということを確認しなければ、否定である空性を正しく確認できないとしているのである。

こうしたツォンカパの空思想を構造的に分解するのならば、空の基体・否定対象・否定・否定を成立させる正理知/論証因の問題に還元することができる。空に関するあらゆる問題はすべて彼の空思想に特徴的な「否定対象の確認」という、空性に関する命題が成立する前段階においてすべて規定するという方法によって取り扱われることになる。

ツォンカパが行った作業の第一のものは、否定対象として代入されるものを限定する作業である。すなわち否定対象を、二障などの「道の否定対象」(lam gyi dgag bya) と、論理的に破綻する「正理の否定対象」(rigs pa'i dgag bya) に分類し、後者はさらに主体・客体の二種、すなわち誤った分別知とその思念対象 (zhen yul) とに分類され、通常ツォンカパが否定対象の中心とするものは、この正理の否定対象の後者の客体にほかならない。

この正理の否定対象の形象を「作業仮説上設定」(brtgas pa mtha' bzung) し、知に顕現させることが否定

対象の確認作業にあたる。ツォンカバの空思想は、この否定対象の確認作業を、単にインド仏教文献に表れる「それ自身の特質によって成立しているもの」(rang gi mtshan nyid kyi grub pa) などといった特定の概念や用語のうちの何が否定対象に代入されるのか、という解釈上の問題としてではなく、むしろ、否定基体における否定対象を捉える把握すべてに共通した把握形式が、その思念対象の領域化をどのように行っているのか、という問題、すなわち極めて実践的な問題として捉えていることに特徴がある。ツォンカバはこの思念対象の領域の特定化を「否定対象の境界線/分岐点」(dgag bya' i tshad) などといった一連の術語によって表現するが、それは「否定対象とそれ以外のものが分岐する分岐点そのもの」を表現し、否定基体における否定対象を捉える把握すべてに共通した把握形式というものを想定し、その思念対象の領域化がどのように行われるのかということに、空思想の本質を見出そうという試みに他ならない。そしてその結果、空の基体についても有為法が主要なものであり、無為法は副次的なものであるとか、否定対象を計量する正理の適用範囲などについてのさまざまな規定が行われることとなるのである。これらは極めて論理的、構造的に行われるが、すべてが立脚しているものは、「否定対象の確認が正しく行われた後に正しく空性が確定される」という理論にほかならない。

通常空性を理解していない者、すなわち否定対象の確認をしていない者にとって、否定対象たる俱生起の法我執の思念対象と「単なる有」との両者は無区別な混合状態のみ顕現している。この混合状態より、元来存在しないはずである否定対象を「作業仮説上設定」し、混合状態から俱生起の法我執によって捉えられている領域部分のみを抽出し、差異化する作業が否定対象の分岐点を設置することによって可能となる。否定対象の確認作業は否定対象たる俱生起の法我執の思念対象とは何かという問い掛けであり、それはすべての衆生に共通している、この目の前に現れている現象世界に対する普遍的な誤謬とは何か、という問い掛けにほかならない。それはあくまでも自己反省的、内省的な営みであり、この現象世界に我々が常に形而上の真理の存在を期待していることへの反省にほかならない。彼が否定対象を捉える知を「真実把握」(bden 'dzin) と呼ぶこともこのような真理への期待感を表現したものととも考える得るし、その形而上の実体的唯一無二の真理が不在であり、すべてが何らかのものに依存せずには成立していないことが「真実不成立」「空」ということなのであろう。そして空思想とはそれ以上のものでもないし、それ以下のものでもないとしたのがツォンカバの最大の功績であると思われる。

ツォンカバの空思想は、「否定対象の確認が否定に必ず先行しなければならない」ということより、結果として得られる命題はひとつの形式によってさまざまな空思想を表現することを可能にしたが、その本質は、空を捉える知と空でないものを捉える知との対立関係に立脚した、「我々の心の奥底に潜んでいる輪廻の根本原因となる無明とは何か」という問題そのものへと還元できる。仏教的真理というものは、煩惱論と切り離せない関係にあることは当然であろう。しかし彼が極めて当たり前のことを仏教論理学や唯識思想、中観思想などのさまざまな思想を通底するひとつの構造的な体系を構築したことは、ツォンカバの空思想が歴史に残した痕跡である。そもそも「空とは何か」ということが「無明とは何か」ということへと還元できるとするツォンカバの発想は時代を圧倒し、その後も脈々と次世代へと受け継がれ、今日でもなおその宗教的輝きを決して失っていないのである。

最後に、この三年間日本のチベット学の中心でもある大谷大学にて、特別研究員として受入れて頂き、福田洋一先生をはじめとして諸先生方、真宗総合研究所のスタッフの方々、すべての方にさまざまなご指導を頂くことができた。ここに深く感謝申し上げますとともに、研究成果をご報告申し上げ、今後ともこの学恩に報い、大谷大学の良き伝統の末席を汚さぬよう一層精進することを誓い、この報告の結びとさせていただきます。

# 前漢後期中朝・尚書と皇帝の日常政務

本学非常勤講師 米田 健志

中国官僚制度史において前漢の中期、昭帝時代に中朝（内朝）と呼ばれる側近集団が出現したことは一つの画期であり、この中朝は以前から存在していた尚書とともに、徐々に中央政府における重要性を増し、やがて時を経て唐代に至り、政府の中枢たる三省へと成長してゆくその萌芽となったのである。しかし前漢時代の中朝については従来、政治史的な視点からの分析が多く、そのため中朝という集団がどのように構成されていたのか、また宮中のどのような場所に存在していたのか、皇帝の政務遂行にどのように関わっていたのかという、官僚制的な視点からの考察はなお不十分であった。

中朝を構成する個々の官職が何かについては、『漢書』劉輔伝注に大司馬・左右前後將軍・侍中・常侍・散騎・諸吏が挙げられており、また、これらが加官（本官に付加される官職）であることから、『漢書』百官表で同じく加官とされている諸曹・給事中も中朝官であるとされる。ここまではすでに先行研究においても明らかにされているが、しかし『漢書』百官表や『漢旧儀』などに記されたこれら中朝官の職掌は多様であり、そこにはなんらの統一性も無いように見えるのである。従来この点については等閑視されており、これらの官職が中朝官という一つの範疇に含まれる理由については未解明であったのだが、このたび筆者が明らかにしたところでは、中朝官の共通性とは、禁中への出入りを許されていたことである。禁中とは、皇帝とその家族が生活をする私的な空間のことで、そこは宮殿内の他の区画からは厳重に隔離された、一般の官僚には立ち入りの許されない場所である。なお、皇帝が宮殿を出て行幸する場合も、その車馬行列においては皇帝の乗輿の前後に仮想的に禁中が設定された。いずれにせよ中朝官とは、一般の官僚が侍中・給事中などの官職を加官されることで、禁中への出入という特権を付与されたものなのである。

ただし禁中が、皇帝にとって単なる私的な生活空間でしかないのであれば、皇帝と中朝官の関わりは政治上さほど大きな意義を持たないであろう。しかし、皇帝は儀礼的色彩の強い重要行事を宮中正殿である未央宮前殿において行う以外にも、日々繰り返される日常的な書類決

裁などを禁中において行っていた。昭帝ののち宣帝時代には、皇帝が禁中を出て丞相以下の一般官僚を接見し政務を行うのは五日に一度と規定され、それ以外の日には皇帝は禁中で政務を行っていたのであり、中朝官は皇帝の書記である尚書とともにこれに関与していた。それゆえ中朝官は禁中に入出することで、側近として政治上大きな影響力を皇帝に与えることができたのである。なお、当時の一般官衙にも「便坐」と呼ばれる長官の私的空間が備えられており、長官がそこで政務を行うこともあったが、この便坐には「門下」と総称される属吏が出入して、長官の側近集団を形成していた。規模の大小、機能の多寡という違いはあれど、宮殿と一般官衙における便坐と禁中、門下と中朝官の類似性は興味深い。

なお中朝官は、全体として禁中における皇帝の側近集団を形成してはいたが、すでに先学が指摘しているように、漢代においては個々の中朝官の間にはなんらの統属関係も無く、これは中朝が当初から明確な機能を有する組織として創設されたものではないことを意味する。中朝を構成する個々の官職は、史料が充分ではないものの、前漢中期以前の各々異なる時期に設置されたことが窺われる。その設置目的も、侍中のように単に皇帝の話し相手として、または皇帝の介添え役として、または散騎のように行幸中の威儀を整えるために等さまざまで、必ずしも政治的な意図のもとに設置されたわけではないと考えられる。こうした諸官職は、それらが禁中に入出するという共通性を有するがゆえに、やがて皇帝が禁中で政務を執る際の側近としても重用されるようになり、結果として中朝と総称されるようになったのであろう。

また漢代において皇帝の書記である尚書は、詔勅の起草や上奏文に対する批答の作成など、唐代には中書舍人が担当していたような職務を行っていたと考えられるが、この職務もやはり禁中でなされていた。したがって皇帝の禁中における日常政務とは、主に尚書が起草した詔勅の原案や臣下から取り次いだ上奏文などの、さまざまな文書に対する決裁を行うことであるが、中朝官はこうした皇帝の政務にどのように関与していたのだろうか。

中朝官のうちでも給事中と諸吏とは、「平尚書事（ま

たは平尚書奏事)」という職務を行っていたことが史料に見えるが、従来この平尚書事については、その意味が明らかにされてはいなかった。筆者の考えでは、「平」は「評」と同義であり、平尚書事とは皇帝が文書決裁を行う際に尚書とともに近侍し、その判断の参考に供するために評議をすることで、尚書事とは、尚書の起草した詔勅や尚書が取り次いだ上奏文などのことを指すのである。

一方、侍中・中常侍に関しては、こうした評議に参加したという史料が見出せない。また、侍中・中常侍については、禁中において皇帝と起臥をともにする、もしくは宴席に伺候する、または便器・衣奩の管理に至るまで、政務以外のより私的もしくは個人的な場面において、皇帝に近侍する例がしばしば見られる。しかし、これは直ちに侍中・中常侍が皇帝の政務に関与しなかったことを意味するのではない。漢代にすでに文書行政が高度に発達していたことは、簡牘史料の出土からも周知の事実であるが、その反面、官衙内部における政務執行に際しては、口頭による意志の表明・伝達——しばしば「白（申す、の意）」と表現される——が大きな比重を占めていたことが史料からは窺われる。「白」とは表現されないが、先の給事中・諸吏による評議もその一端である。侍中・中常侍が政治上の問題に関して、こうした「白」を皇帝に対して行った事例は数多く見られるが、皇帝の私生活にまで踏み込んで日々近侍することで、その意向を熟知し得る侍中・中常侍の「白」は、給事中・諸吏以上に、皇帝の政策決定においてより大きな影響力を有していたと考えられる。また平尚書事への参加は認められないものの、侍中・中常侍が文書の処理に関与していなかったわけではなく、おそらくは尚書を経由せぬいわば非公式の径路による上奏文が、侍中・中常侍によって皇帝に取り次がれる事例はいくつか見られる。しかも、それらは謀反の告発といった緊急性の高い、もしくは他への露見を避けるべき機密を要するようなものであり、侍中・中常侍による上奏文の取り次ぎが、尚書を通じての日常的な上奏文の取り次ぎに比べて、より重要であった可能性は高いのである。

以上、皇帝と尚書を中心として行われる政務に、中朝官がどのように関与していたかを述べてきたが、ふたたび一般官衙を比喻に用いて表現するならば、要するに中朝官は禁中において——少なくとも政務の側面では——、長官たる皇帝と書記官たる尚書とを取りまく長官官房を形成していたのである。この皇帝の官房においては、日常的に尚書によって取り次がれる上奏文等の決裁に際しては、給事中・諸吏が評議を通じて皇帝の判断を補佐し、また侍中・中常侍は「白」によって皇帝の政策決定

に助言をし、また緊急性・機密性の高い文書を尚書を経由することなく皇帝に取り次ぐことで、政策決定に迅速性をもたらしたのである。

以上が前漢後期における、中朝・尚書と皇帝の日常政務との関わりについての概要である。この中朝が尚書とともに後世どのような変遷を経て、唐代の三省へと成長してゆくのかについては、今後のさらなる考察が必要であろう。ただ一つ付言しておくならば、唐代において中書から下された詔勅を審査し、異議あればこれを修正したうえで封還する権限を有し、さらに諸官衙から上申された上奏文の審査にもあたった門下省の機能については、通説では、皇帝に対する貴族層の意志を代表するものとされている。むろん筆者もそれに何ら異論はなく、魏晉南北朝の貴族制政治を経たのちの唐代においては、確かにそうした機能が門下省には備わっていたであろう。ただし、唐代の門下省とくに給事中が中心となつてなされる詔勅・上奏文の審査という職務は、前漢の中朝における給事中による「平尚書奏事」を起源とするものであることは確実であろう。さらにまた、唐代の門下省の起源たる中朝官との類似性を先に指摘した、前漢の一般官衙における側近集団がすでに「門下」と称されていたことも決して偶然ではあるまい。

真宗総合研究所彙報 2005.10.1 ~ 2006.4.30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇11月17日(木) 12:10~ (博綜館5階第4会議室)

1. 2006 (平成18) 年度「一般研究」の選考について
2. その他 ①2005 (平成17) 年度「指定研究」の研究補助員委嘱(追加)について  
②2005 (平成17) 年度 特別研究員の委嘱任期延長について  
③その他

◇3月9日(木) 15:10~ (博綜館5階第4会議室)

1. 2006 (平成18) 年度「指定研究」について
2. その他 ①2006 (平成18) 年度「指定研究」嘱託研究員・研究補助員の新規採用について  
②2005, 2006 (平成17, 18) 年度 特別研究員の委嘱任期延長と新規採用について  
③2006 (平成18) 年度 真宗総合研究所予算(案)について  
④その他

◇4月25日(火) 12:10~ (博綜館5階第4会議室)

1. 2006 (平成18) 年度「指定研究」について
2. その他 ①本年度「指定研究」の研究計画の一部変更について  
②本年度「一般研究」の研究組織の一部変更について  
③その他

○「一般研究」研究代表者説明会

◇3月22日(木) 15:30~ (博綜館5階第4会議室)  
(響流館4階 真総研ミーティングルーム)

1. 研究遂行上の準備と諸注意について
2. 研究活動に利用する機器備品等についてのヒアリング
3. その他

○「指定研究」チーフ・庶務連絡会

◇4月18日(火) 12:10~  
(真総研ミーティングルーム)

1. 2006年度「指定研究」の研究体制について
2. その他

■大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

◇11月8日(火) 12:10~ (真総研ミーティングルーム)  
第1回研究会 本年度の活動内容の確認。

- ・今年度の公開研究会(講演)の開催について
- ・文献目録作成の方向性について

◇12月13日(火) 17:00~19:00

(真総研ミーティングルーム)

第1回公開研究会(講演)

小山正文氏(嘱託研究員・同朋大学非常勤講師)  
「親鸞伝史料としての中世真宗絵巻」

◇3月6日(月) 14:00~16:00

(真総研ミーティングルーム)

第2回公開研究会(講演)

塩谷菊美氏(神奈川県立茅ヶ崎高等学校教諭)  
「『親鸞聖人御因縁』の展開」

◇3月6日(月) 16:00~ (真総研ミーティングルーム)

- 第2回研究会 来年度の研究体制について討議。
- ・研究班の体制について
  - ・公開研究会(講演)の開催について

◇3月16日(木) 14:30~ (響流館4階会議室)

- 第3回研究会 今年度の総括と来年度の活動内容を討議。

- ・研究成果の公開について
- ・来年度公開研究会(講演)の開催について
- ・文献目録作成の進捗状況報告と今後の方針の確認

◇4月12日(火) 18:00~19:30

(真総研ミーティングルーム)

第4回研究会

- ・第3回公開研究会(講演)の開催について
- ・今後の公開研究会について

なお、上記研究会の他、文献目録作成のためのパート会議並びに作業を行った。場所、日時は以下の通りである。

場所：真宗総合研究所 御遠忌記念特別指定研究班  
日時：11月30日(火) 16:00~・12月14日(火) 16:00  
~・3月6日(月) 17:00~

■指定研究研究会

大学史研究

【研究会】

《作業連絡会議》

2005年

◇10月11日(火) 16:30~19:00

(真総研ミーティングルーム)

◇11月8日(火) 16:30~19:30 (同上)

◇11月29日(火) 16:30~19:30 (同上)

◇12月20日(火) 16:30~19:30 (同上)



2006年

◇2月20日(月) 16:10~18:00 (同上)

◇3月20日(月) 16:00~18:00 (同上)

◇4月26日(水) 16:10~19:20 (同上)

《他研究機関における大学史研究・  
大学史史料室に関する研究会》

◇10月5日~7日

全国大学史資料協議会2005年度総会・全国研究会  
(慶應義塾大学)

(参加者:日野圭悟&lt;研究補助員&gt;)

◇10月21日(水)

東本願寺宗門現代史作業報告会  
(東本願寺企画室)

(参加者:水島見一&lt;研究員&gt;、橋本真&lt;研究補助員&gt;)

◇11月30日(水)

全国大学史資料協議会西日本部会 第4回研究会  
(東大寺本坊)

(参加者:加藤基樹&lt;研究補助員&gt;、森剛史&lt;研究補助員&gt;)

《大谷大学図書館貴重書閲覧室における調査》

◇2006年2月10、15、17、20、22、27日、3月8、10、15日

香月院深励関係書籍調査  
調査者:織田顕祐<チーフ>、東館紹見<庶務>、福島栄寿<研究員>、加藤基樹<研究補助員>、日野圭悟<研究補助員>、森剛史<研究補助員>ほか、大谷めぐみ、大畑博嗣、工藤克洋<以上、アルバイト>

《清沢満之記念館との共同研究》

◇10月14日(金)

清沢満之『臘扇記』の影印出版・注釈研究等に関する共同研究の持ち方について

(名古屋東別院)

出席者:織田顕祐、加来雄之

◇2006年3月1日(水)

清沢満之『臘扇記』に関する共同研究について  
(愛知県碧南市清沢満之記念館)

出席者:織田顕祐、加来雄之

なお大学史研究では、先年度に引き続き『清沢満之全集』未収録文献の翻刻、テキストデータの校正などの事後処理をはじめ、佐々木月樵研究のための資料調査収集、近世学寮年表の作成研究や大学史資料原本ならびに写真資料の再調査・長期保管作業、東本願寺教団現代史の調査研究などの研究課題について、それらに関する調査・整理作業を日常業務として行った。

国際仏教研究班

2005年度後期活動報告

&lt;英語班&gt;

①2005年11月8日 12:10~ (響流館4階会議室)

“An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings”の進行状況について確認。ならびに、今後の新たな翻訳作業について検討を行った。

②2005年12月20日 12:10~

(真総研ミーティングルーム)

新たな翻訳作業について、具体的にテキストの選定と、研究会の日程を検討した。テキストには清沢満之の「真宗大学開校の辞」を正式に決定。候補としては佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」もあがったが、これは後の検討課題とされた。

③2006年1月19日 14:30~

(真総研ミーティングルーム)

「真宗大学開校の辞」の翻訳作業を行うのにあたり、それに必要な基礎的事項の確認を行う。当日は田村晃徳研究員より「清沢満之『開校の辞』をめぐって」と題された発表が行われた。発表は、(1)「真宗大学開校の辞」の現代語訳と、語句の説明(2)開学式典の当日の様子や参加者の経歴などの確認(3)真宗大学東京移転までの変遷について歴史や名称などの確認(4)「真宗大学開校の辞」にでてくる「他の学校とは異なりまして」の意味についての検討、などを中心に行われた。

④2006年2月2日・3月1日・8日・15日 14:30~

(真総研ミーティングルーム)

4回にわたり、「真宗大学開校の辞」の翻訳検討会議を行ない、作業は完成した。3月8日には安富信哉教授にも加わっていただき、翻訳された文章について意見をいただいた。翻訳が完成した上で、『真宗総合研究所研究紀要』に発表する際には、序文を加えることが確認された。

&lt;ドイツ班&gt;

①2006年3月24日(金) 13:30~

(真総研ミーティングルーム)

フランス国立高等研究院との「宗教の世俗化」シンポジウム(2006年11月末開催予定)の打ち合わせをし、本学側の発表者の発表計画を検討した。

マイケル・パイ“Civil Religion in Contemporary Japan”(現代日本における市民宗教)

阿部利洋 “Mortal Remains and the View of Life and Death : the Funeral Business of Contemporary Japan” (お骨と死生観—現代日本の葬送ビジネスから)

藤枝真 “Buddhism and Medicine in Contemporary Japan with Special Reference to Terminal Care” (現代日本における仏教と医療の関係—ターミナルケアを巡って)

井上尚美 “No Hell Below Us : Twilight of Religious Cosmology and Modernization of Japan” (地獄の喪失 : 宗教的宇宙観の衰退と日本の近代化)

〈中国班〉

①大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料の目録作成

10月 中国東北・東部モンゴル地域関連資料から目録作成作業を継続中。

3月20日現在、資料約500点(仮番号1～7)の調査カード作成を完了し、なお旧満洲関連の綴資料(仮番号8・9)の目録作成作業を継続中である。

②中国東北師範大学との共同研究「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」

2006年8月末に、東部モンゴル地域の赤峰・朝陽・ウランホト・阿爾山・葛根廟において4日間程度の日中合同調査を実施することで合意に達した。

③中国布教および中国仏教研究従事者藤井静宣旧蔵資料の収集

10月18日 木場(研究員)および山本(研究補助員)が資料所蔵先の真宗大谷派浄園寺(豊橋市)を訪問し調査を実施。今般の調査によって、豊橋空襲を資料疎開によって奇跡的に免れた資料群(ダンボール箱35箱)が存在することが初めて明らかになった。調査の結果、資料は藤井静宣師収集の中国仏教関係書籍・雑誌・新聞類が大部分を占め、加えて、師が編纂にあたった『東本願寺上海開教六十年史』(1937年)に関わる資料群、および師による留め書き類が存在すると知られた。

〈第1回全体会議〉

◇2006年4月14日(金) 16:10～18:30  
(真総研ミーティングルーム)

西藏文献研究班

《公開講演会》

◇2006年3月14日(火) 16:30～18:30

(響流館3階メディアホール)

「チベットの歴史建築物の紹介—10年にわたる研究と保護活動を通じて—」

ピンピン・デ・アゼヴェード氏 (Pimpim de Azevedo, Tibet Heritage Fund 代表)

アンドレ・アレキサンダー氏 (André Alexander, 同代表)

平子 豊氏 (同中国プロジェクト責任者)

1996年以降、チベット・ラサ旧市街の保護活動を皮切りとして、主にチベット建築の保護修繕、測量記録及び伝統技術者の育成に力を入れているNGO団体チベット・ヘリテイジ・ファウンド(Tibet Heritage Fund)の10年にわたるプロジェクト内容をまとめた講演。

まずアンドレ・アレキサンダー氏がプロジェクトの概要を説明した後、7世紀に建立されたチョカン寺の構造と特徴を、アジャンタやナランダ等のインド寺院建築との共通点に焦点をあてて解説。次いでピンピン・デ・アゼヴェード氏が、モンゴル国南ゴビ砂漠にあるサンギーン・ダライ (Sangiin dalai) 寺に残るチベット=中国様式の建築ダウンホーリン・ドゥガン (Duinkhoriin dugan) 修復プロジェクトについて説明。次いで平子豊氏が、アムド・ゴロク地方におけるラジャ (rwa rgya) 寺修復プロジェクトについて説明した後、再びアンドレ・アレキサンダー氏がラダックにおける活動を説明した。

学内外から参加した約80名の聴衆は、写真、図面などの資料を豊富に用いた講演から多く知見を得るとともに、この重要かつ困難なプロジェクトを長期にわたり継続している同団体に對し大きな讃辞を送った。

真宗本廟(東本願寺)造営史研究班

《事務連絡会議》

◇2006年4月28日(金) 16:10～18:30

(真総研ミーティングルーム)

- ・造営史研究の方針と内容の策定
- ・事務連絡網について
- ・その他

■人事(2006年4月1日付)

研究所長 (新)兵藤一夫 (旧)沙加戸弘

研究所主事 (再任)浅見直一郎

□特別研究員

\*新田智通

国 籍 日本

現 職 EBS (イースタン・ブディスト協会)  
事務局員・編集委員

研究期間 2006年2月1日～2007年1月31日(延長)

研究課題 「部派仏教における過去仏思想の研究—  
Mahāpadānasuttaとその注釈書を中心とし  
て—」

指導教員 宮下晴輝教授

\*デッシー・ウゴ (DESSI Ugo)

国 籍 イタリア

現 職 (マールブルク大学博士課程在学中)

研究期間 2005年10月1日～2006年3月31日(延長)

2006年4月1日～2007年3月31日(延長)

研究課題 「現代浄土真宗における社会倫理の研究」

指導教員 安富信哉教授

\*ポルク・エリザベッタ (PORCU Elisabetta)

国 籍 イタリア

現 職 (マールブルク大学博士課程在学中：日本  
学術振興会外国人特別研究員)

研究期間 2005年10月1日～2006年3月31日(延長)

2006年4月1日～2007年3月31日(延長)

研究課題 「現代日本における禅仏教文化の考察」

指導教員 ロバート・F・ローズ教授

\*井黒 忍

国 籍 日本

現 職 (日本学術振興会特別研究員)

研究期間 2006年4月1日～2009年3月31日

研究課題 「中国近世の山西汾河水系における水資源  
の開発と利用」

指導教員 礪波 護教授

研 究 所 報 第 48 号

2006年5月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435